

国際主義 (Internationalism) と国際人 (International Person)

法務省秘書課国際室語学アドバイザー 柴原美奈

1 国際人って何？

「国際的」や「国際化」という言葉を最近メディアでよく耳にします。しかし、「国際的」とはいったいどういう意味なのでしょう。また、どのような人間が「国際人」なのでしょう。「国際人」とは二つ以上の言語を話せる人のことをいうのでしょうか？もしそうであるならば、「国際人」と「バイリンガル」とはどの様に区別すればよいのでしょうか。

自国から出たことのない人でもバイリンガルはいます。たとえば、マレーシアに住むマレーシア人の中には英語もマレーシア語も両方話せる人が大勢います。この様な人達は自動的に「国際人」といえるのでしょうか？そうであるならば、二つの国に暮らし、二つの言語を話せるようになった人と彼らはどの様に違うのでしょうか？

おそらく大きな違いは、海外生活によって言語が身についた人はその国の文化的な部分も同時に身につけた可能性が高く、一つの国にしながら二つの言語を操る人よりも「バイカルチュラル (Bi-cultural)」になるという点でしょう。では「バイカルチュラル」であることの強味はなんなのでしょうか？私は、一つの問題をより色々な角度から見る事が出来ることや、異なる意見に対してより敏感になることであると思います。例えば、日本を離れてみないと日本という国を外から捉えることは出来ません。物事を内側から見る時と外側から見る時では違って見えるものです。英語の表現ではしばしば「一つの問題については必ず二つの見方がある」と言われます。つまり一つだけの正しい見方というものはない、ということです。ある状況を正確に判断する為には、先ずはじめに全ての側面からその問題を捉えてみる必要があることは多くの方に同意して頂けるのではないのでしょうか。そして、全ての側面から問題を捉えるためには、なによりも先ず第一に、「問題を考える視点は複数あるのだ」ということをしっかり認識していることが大事なのではないかと思います。私は、「インターナショナルであること」とはこの様に複眼的な見方、物事の捉え方が出来ることではないかと考えています。これはすなわち自身の考え方が唯一絶対なものではないと考え、その良い面と悪い面を見極めることが出来ることを意味します。

私が英国に住んでいた頃は、英国という国が外からどの様に見えるのか分からず、そしてまた日本人であることがどういうことなのか認識していませんでした。最初は私と英国人の友人との違いがあるということすら意識していませんでした。通う学校も同じ、食べるものも同じ、着る服も同じでしたから。私は自然に将来は英国人らしい名前のジョーンズとかスミスと名乗る人と結婚すると想像していたのです。子供は大人よりもオープンな

のでクラスメートから差別にあうことはありませんでした。日本人に対してより警戒心を持って接していたのは大人の方でした。大人は時にはあからさまな差別意識を口にしましたし、またある時は単にそういった行為に対して非常に鈍感でした。例えばこういう出来事がありました。私が10歳の時に英語（国語）の授業で学年トップになりました。一学年で4クラスあり、一クラスに30人の生徒がいました。先生は私が作文と読解で一番だったと発表し、クラスに向かって「イギリス人じゃない人が一番になったのを恥に思いなさい」と言いました。この教師は褒めるつもりで言っていたと分かっていたのですが、その言葉は日本人である私にとっては鈍感なものであり、差別的なものでした。その言葉によって私の喜びと一番になったという誇らしい気持ちは吹き飛んでしまいました。

もう一つの例は校長先生の言葉です。毎朝私たち生徒はホールに集まって朝礼を行い、校長先生のお説教を聴きました。この中で校長先生は聖書の言葉を引用して、勇気を持つこと、寛容であること、または親切であることなどについて教えてくれました。一年に一回、校長先生は必ず、とても勇気のあるキリスト教の看護婦さんの話をしました。迫ってきた敵から逃れるため、この看護婦さんは中国人の子供を連れて山に逃げるのです。「勇気」を伝える良い物語でしたが、この「迫ってくる敵」は残酷でクリスチャンではない日本人でした。私はこの話を聞くと耳が燃えるようになったのを憶えています。ちなみに、私と姉は150年の歴史を持つ学校で初めての日本人生徒でした。

こうした経験を経て私は段々と「差別」というものに対して敏感になり、実際には差別はない場合でも時には「差別」を意識する様になりました。毎年イベントとして老人ホームに行き、クリスマスの歌を歌うときもこの様な混乱した思いを感じたものです。クリスマスは優しさとボランティア精神の時期です。私は聖歌隊に入っており、毎年老人を喜ばせる為に老人ホームへ行っていたのです。しかし私は英国人の年配の方々に囲まれるのはとても苦手でした。早く逃げ出したい気持ちになるのです。クリスマスキャロルを歌った後で私たち生徒は老人ホームの皆さんとお話をして楽しんだり、歌を褒めてもらったりするのですが、私はいつも隠れるように後ろの方で待っていて、言葉一つも交わすことはありませんでした。その理由は、老人ホームにいた老人の多くは男性で第二次世界大戦を戦った人達であったからです。

私は、自分が日本人であるということが分かっただけならば彼らは私になにか言うのではないか、或いは何らかの嫌悪感を表すのではないか、ということ非常に恐れていたのです。今思い起こしてみると、わずか10歳の自分がなぜそこまで第二次大戦のことを意識したのか、またどうやって日本または日本人に対して良く思わない人がいると認識していたのか、不思議な気がします。

この様な話しをすると、イギリスのあまり好ましくないイメージを作っているのではないかと思います。これらの例は少数のケースで全体的に考えるとイギリス人は私を暖かく扱ってくれました。ここで私が言いたかったのは、この様な経験をしたからこそ私は他

のマイノリティに対して思いやりを持つことが出来た、ということです。そういうつもりがなくても、あまり思慮深くない不必要なコメントで人を傷つけることが出来ると分かりました。しかし難しいところは敏感になり過ぎず、また鈍感にもならないようにバランスを取ることでしょう。敏感が行き過ぎると差別をしていないのに差別として取られることがあります。2年前にこういう話がありました。4歳の小さな白人の男の子がお母さんと一緒にスーパーに行きました。そこで、その男の子はアフリカ系の赤ちゃんが乳母車に乗っているのを見て、指を指して「猿」と言ったのです。この赤ちゃんの母親は非常にショックを受け、結果としてはその白人の男の子はそのスーパーに立入禁止となってしまいました。ここでの議論は、その男の子の親は異なる人間の気持ちに対して敏感になるような教育をしていなかった、これは改善すべきである、ということでした。

私は、英国で生まれ育ち、特に大学に行くようになった時様々な国の人と会うことが出来ました。色々な文化と触れ合い、色々な考え方をすることも出来ました。それ以来ずっと私の耳に残っているのは大学の教授の言葉です。ある時私の論文について論議していて、私の意見に賛成しない教授を見て、私も彼女の意見に合わせようと思いました。その時この教授はこう言ったのです。「ミーナ、賛成しないことを怖がらないで。私がいつも正しい訳ではないのよ。学生はある時点で必ず教師より上にくるものなの。それが進歩することなのよ。」この言葉は今でも私の心に残っています。私は「国際人」になる為には、様々な異なる意見を考慮すること、そして自分達は完璧ではなく常に「未完成の作品」なのだ、ということ認識していること、が重要なのではないかと考えています。

2 「違う」よりも「似ている」こと

ここまで、「国際人」とは必ずしも海外生活を経験した人を指す訳ではないこと、しかしながら外国での生活を経験した人はより視野の広い、国際的な人間になりやすいこと、をお話しました。海外での生活経験のある人は異文化のなかで自分とは違う見方や考え方に触れることになるわけですから、これは自然なことでしょう。

既にお話した通り、「国際人」とは必ずしも「複数の語学に堪能な人」を指す訳ではありません。勿論、母国語以外にコミュニケーションをとれる語学力があることは色々な意味で可能性を広げることになるでしょう。しかし「言葉」は他人の意見や物事の感じ方を理解する為の「手段」にすぎません。ある言語を話せることは必ずしも完全にその文化を理解していることを意味するわけではありません。同様に、「バイリンガル」であることが自動的にその言語の背景にある文化を受け入れていることを意味するのでもないわけです。

時折私は、日本語と英語のどちらで考えているのか、夢は日本語それとも英語でみるのか、と聞かれることがあります。これに対する答えは実はとても単純なんです。私は、自分が英語をしゃべり、英語環境にいるときは英語で考え、日本語をしゃべり日本語環境にいるときは日本語で思考しているのです。これは、日本語の敬語の使い方に似た感覚だと

思います。敬語を使う時は、相手によって自動的に言葉を調整していますよね。一つ例をあげるならば、私が六歳頃のある場面が思い浮かびます。その時六歳の私はなにかの数を一生懸命数えていました。英語で1, 2, 3, 4, 5, と数えたところで、母親に突然なにかを日本語で尋ねられたので、私は母に日本語で返事をしました。そしてまた数え始めたのですが、その時には六, 七, 八, 九, 十, と日本語になっていました。母親からの日本語の問いかけが私を「日本語モード」に入れ替えた訳です。私自身はまったく無意識のうちに言葉の切り替えをしていたわけで、この「切り替え」は非常に自然に起きたのでした。

多くの人から「日本語と英語のどちらで考えるのか」と聞かれるということは、みなさんは私がある言語から別の言語へと常に翻訳作業をあたまの中でしていると仮定しているのではないかと思います。実際はそうではありません。英語と日本語は私の頭の中では非常に離れたもので、ある言葉を翻訳することは、いわばこの二つの言葉の間に橋をかけて繋げる、私にとってはとても難しい作業なのです。例えば、「木」という言葉をとって考えてみます。この単語が使われる時に私が思い描くのはとても日本的な「木」の姿です：高く、細身で、浅い緑色の木です。ところが、誰かが英語で“tree”と言う時は、私が心の中でイメージするのはまったく姿形の異なる木になります：大きく、葉が厚く繁った、濃い緑の英国の木なのです。つまり、「木」と“tree”は私の頭の中では非常に異なるイメージを持っているのです。したがって、翻訳するという行為のなかでは、私はあるイメージをもう一つのものに取り替えなければならず、私は懸命に想像力を働かせて自分自身を意識的にもう一つの言葉の世界へと放りこむ必要があるわけです。

二つの言語をうまく操ることが出来ることは、違ったタイプの人間と意思疎通をし、多くの異なる考えを吸収することを可能にします。しかし、「言葉を知っていること」は、その人間がその言語の裏にある文化的背景や特質を備えていることを必ずしも意味する訳ではありません。日本で私がこれまで直面した問題は言葉よりもむしろ文化からくるものでした。外見が日本人ではないと明らかにわかる外国人の場合は、日本人は、その人物が日本語を話さず、日本の文化を理解せず、従って「違う」のだ、と初めから考えます。ある時、私の外国人の友人が、電車に乗っている日本人たちは彼らの隣に座るのをなるべく避けようとする、と私に話したことがありました。彼らはこれを嫌悪とか人種差別と解釈しがちなのですが、私はむしろこれは単に「外国語を喋らなければいけないかもしれない」という恐れから来ているものではないか、と思うのです。一方私の場合は、私の外国人の友人が直面したような一方的な好奇心で見られることはありません。外見上私が外国で育ったことを気付く人はいないので、私は日本の町並みに自然に溶け込むことが出来るわけです。

しかしこの事実自体が問題になる時があります。例えば以前、私は通勤電車の定期券の買い方を知りませんでした。そこで私は切符売り場にいる人にどうやって定期券を買ったらいいのか尋ねたのですが、この時の駅職員は「そんなこと見れば分かるんじゃないの」

とでも言いたげな非常に怪訝な顔つきで私を見ていました。つまり、私が流暢な日本語で通勤定期の買い方を尋ねることが出来た為に、この人物は私が日本の様々なことに関する知識も当然あるものと自然に考えたのです。似た様な経験は私が電車の中にバックを忘れてしまった時にもありました。幸運なことに誰かがそのバックを届け出てくれたので、私は遺失物預かり所に行きそれを取り戻すことが出来ました。バックを取り戻す為に私は判子を押すように言われたのですが、その日私は持つてくるのを忘れてしまいました。そこで私は、代わりに赤インク台を手渡されて拇印を押すように言われたのですが、以前に拇印を押すような場面には一度しか遭遇したことがなかった私は当惑してしまいました—私は目の前にある書類を見ながら、どの指を使ったらいいいのか分からなかったのです。(ちなみに、ただ一度だけ指をインクに染めたのは、犯罪者としてではありませんよ！あれは私が四歳の時に指を使って葉っぱの絵を書いていたときでした。) 幸運なことに私の横にいた人が人差し指で押捺しているところだったので、それを見て、ようやく私もどうしたらいいのか分かりました。もしくなりこの人がいなかったらば、私は手のひら全体でスタンプしていたかもしれません。お相撲さんに出来るのですから、私だって出来るはずです！

この様な些細な思い違い、間違いがあらゆる場面で起きるわけです。私の姉が服を買いに行き、試着室に入った時も似たような話があります。日本では家に入る時は靴を脱ぎますが、試着室でも靴を脱ぐところが多いですね。日本では家に入る時は靴を脱ぐ、という事は良く知られていますが、お店の試着室でも靴を脱ぐ必要があることは誰も姉に教えてくれませんでした。その結果、姉はうきうきしながら靴をはいたまま試着台に足を踏み入れ、お店の人に丁寧に靴を脱ぐように諭されてしまった、という訳です。また別の時には、姉はジムで泳いだ後にお風呂場に入り湯船に浸かろうとしたところ、そこで彼女は自分以外の女性が皆裸であることに気付いたのでした。その時、姉はまだ水着を着ていたのです。そこにいた人々は姉をどんな顔でみていたことでしょうか！(ここで私の姉の話を持ち出したのは、私自身の失敗談を話すのはあまりに恥ずかしいからです・・・)

外見上差異がなくても私が自分の「違い」を感じる場面は、英国における私の経験と日本におけるほかの人々の経験とが似ている場合にも出てきます。私の日本人の友人は子供の頃の思い出をしばしば話すのですが、そのなかでよく出てくるのが京都、北海道などへの修学旅行の話です。大部屋でみんなで夜遅くまで話をしたことなど楽しかった思い出を話している時、私も最初は一緒にその会話に参加しているのですが、話の途中で突然自分は日本の修学旅行を経験したことがないのだ、ということに気付き、それ以上話に入っていけなくなってしまいます。勿論私も似たような学校の旅行(Geography Trip と呼ばれていました)でフランスやドイツに行ったことがあるので、友人の話を私の経験と関連付けることは出来るのですが、話が弾んでより細かい部分の話になると(例えば旅行中の食べ物の話など)、彼らの経験と私の経験の大きな違いに改めて気付く、というわけです。し

かし、この様な「違い」について話し、さらに好みについて話すことは異文化間交流に繋がり、そこから多くのことを学ぶことが出来ます。「違い」に気付くことは会話を減らすことを意味するのではなく、私達自身の経験をより豊かなものにする事なのです。

国際的な見方を身につけるためには、私達は「違うこと」を受け入れ、そして各個人はあるステレオ・タイプではないのだ、ということを真に認識する必要があります。私が英国に住んでいた時、私の友人のほとんどは英国人でしたが、彼らは様々な民族的背景を持っていました。友人の一人は英国人でしたが母親はフランス人、父親はマレーシアと日本のハーフでした。別の友人は英国人の母親とパキスタン人の父親を持ち、またもう一人の友人はベンガル人の両親を持つ英国人でした。このような混じり合った継承はとても一般的なことでこれが多様性のある社会を形成する原因になっているのです。日本も、日本人であることは必ずしも日本人の祖先を持つことを意味しない、という時代に直面し始めています。この新しい状況を受け入れることが出来た時、私達は多くの可能性とチャンスが広がっていることに気付くでしょう。「違い」は私達日本人をばらばらにするのではなく、私達の社会をより力強いものにすると思います。

私達はいわゆる「典型的な日本人」の枠からそろそろ飛び出す必要があるのではないのでしょうか。勿論、ある国民（日本人、あるいはアメリカ人など）を「典型的な」という言葉で単純に語ることは危険なことです。一般的に言って日本は単一民族国家に近い状況ですから、多様性に欠けるといえるのは事実であり、比較的「典型的な日本人」というものを形作るのは容易であるようです。以前元国連難民高等弁務官の緒方貞子氏がこうおっしゃっています。

「日本人は比較的と言って単一民族です。私達は単一民族・単一文化という幻想の中で生きてきました。しかし世界は変わりつつあります。そして、世界で重要であることは、日本にとっても重要であるはずです。」

ある一つの圧倒的支配的民族がいることは「外部」の人間がその社会に溶け込むことを難しくします。いわゆる「"我々"と"彼ら"」という状況になりがちで、ここでは「仲間」と「よそ者」という二つのグループができ易くなります。このような今の日本の社会は、「仲間」と「よそ者」のどちらにも完全に該当しない人間（私の様な人間ですね）に対してはどう対処すれば良いのでしょうか？ 将来的には私のようにどちらのカテゴリーにも分けることの出来ない人々が多く存在することになるでしょう。私達は全ての人間が「個人」として受け入れられる社会を作っていく必要があるのではないのでしょうか。「違い」を強調して物事を見るのは誤りであり、もっと「似ていること」に注目して物事をとらえる必要があるのではないのでしょうか。このような考えを持つことが出来た時、私達は国籍の如何に関わらず、人間は「違う」のではなく「似ている」のだ、ということに気付くことになるのだと思います。

Internationalism and International Person

SHIBAHARA Mina

Linguistic Adviser

Office of International Affairs

Secretarial Division, Ministry of Justice

1 An International Person

"International" and "internationalisation" are words which are frequently bandied around by the media these days but I have frequently wondered what "international" really means and what kind of person can be described as "international". Is an international person someone who can speak more than one language? If the answer is yes, then how are "international" and "bilingual" different? Some people are bilingual without ever having left the country. For example, some Malaysians are able to speak English as well as Malay. Does that mean they are international? In which case, how do they differ from someone who has lived in two countries and has therefore picked up two languages. Probably, the main difference is that someone who has acquired another language through immersion in that language abroad is more likely to have picked up the culture as well, thereby becoming "bicultural" in a way that the person speaking two languages but having experienced only the one culture is not.

What are then the advantages of being bicultural? I would say that you become more aware of different opinions and different ways of looking at a problem. For example, only by leaving Japan, can you look at Japan from the outside. Everything certainly looks different when you are viewing it from the outside as opposed to from the inside. In English, we often say that there are two sides to every question meaning that there is no issue where there is only one right side. I think everyone would agree that in order to judge a situation correctly, you have to look at it from all angles. In order to look at it from all angles, you have to be aware, in the first place, that more than one angle exists. I think that is what being international is all about; being able to accept that your way of thinking is not the only one and being able to see both the good and the bad.

When I lived in the UK, I didn't know what Britain looked like from the outside and I didn't really know what it meant to be Japanese. At first, I was not aware that there was a difference between my English friends and myself. We went to the same school, ate the same food and wore the same clothes. I fantasised that in the future, I would be marrying someone with a name like Jones or Smith, a decidedly British surname. Children are more open to people and so I did not ever meet with any open racism from my classmates at all.

The people who were more wary of Japanese people were adults. They were sometimes downright racist or sometimes simply insensitive. Then again, racism is, in reality, an extreme case of insensitivity. I remember when I was ten years old, I came top of the whole year in English. There were four classes in one year and about 30 students in each class. The teacher announced that I had come top in both English composition and English comprehension and then she said to the class, "You should all be ashamed that someone who is not British has come top of the class." I knew that, in

actual fact, she meant it as a compliment but the result was that not only was she insensitive but she was being racist too. Even though she did not mean to do so, she took away some of the happiness and pride of coming first.

Another example of insensitivity came from the headmistress. Every morning, we would have morning assembly which was when all the students in the school were gathered in the hall and the headmistress would deliver a sermon, quoting from the Bible and teaching us to be brave or tolerant or kind. I remember that about once a year, the headmistress would read a story about a brave Christian nurse who led some Chinese children away over the mountains to escape from the oncoming enemy. A nice tale of courage if it were not for the fact that the oncoming enemy were the cruel, notably non-Christian Japanese. My ears used to burn while listening to this story. I was the only Japanese girl in the whole school aside from my sister. I should point out that my sister and I were the first Japanese girls to be enrolled in the 150-year history of the school.

Owing to situations like the above, I became rather sensitive and so I became wary of racism even when it was not actually there. Another yearly event which led to confusion was the annual visit to the local old people's home to sing Christmas carols. I was in the school choir and Christmas being the time for generosity and charity, my choir was sent to cheer the old people up. I never felt comfortable being surrounded by so many elderly British people. I just wanted to get out as soon as possible. After the Christmas carols, we would go up to these people and they would lavish praise about our singing or would talk to us. I always hung back from the others and managed to avoid saying a single word. The reason for this is that many of the people there were men, men who had been injured in the Second World War. I was so afraid that once they found out I was Japanese, they would say something or look at with hate. To this day, I do not understand why at the age of ten, I was so aware of WWII. How at ten years' old, could I have known that some people would have an unfavourable image of Japan and of Japanese people?

By mentioning the above, I have probably created an unfavourable view of Britain but I would like to point out that although there were isolated incidents, on the whole, I was treated very kindly by the British. Such incidents taught me about being sensitive to other minority groups. Even without meaning to, we can hurt others with some thoughtless, unnecessary remark. The difficulty, however, lies in achieving a balance so that one is neither insensitive nor overly sensitive. When sensitivity is taken too far, racism can be detected where it does not exist at all. Two years ago, a little four-year-old Caucasian boy went with his mother to the local supermarket. The little boy saw a baby of African origin in a pram and pointing at the baby said, "Monkey." The mother of the baby was naturally upset and consequently, the little Caucasian boy was banned by the supermarket from entering the premises. The argument was that the parents had not raised the boy in an appropriate manner to be sensitive to other people.

Growing up in the UK and especially when I went to university, I met with people of many different nationalities. By coming together with different cultures, I was able to come across many different ways of thinking. To this day, I still remember what my professor said to me. We were discussing an essay that I had written and she disagreed with what I had said. Facing her criticism, I lacked the courage to defend myself and found myself agreeing with her instead. Then she said, "Mina, don't be afraid to disagree. I'm not always right. There will always come a time when the student will rise above the teacher but that's how we make progress." These words have stayed with

me and so I now believe that in order to become an "international" person, it is necessary to consider fairly lots of different opinions and to understand that we are not perfect but a "work in progress".

2 More Similar Than Different

I noted that an international person is not necessarily someone who has experienced life abroad, yet it is much easier to become a more international broad-minded person if one has lived abroad simply because one is exposed to differing views and ideas which would not be as easy to attain when living in one country.

As explained previously, an international person is not necessarily someone who has a grasp of different languages, although admittedly, being able to communicate in a language other than one's own is a bonus which opens many doors. Yet, language is simply a tool; the means of understanding another person's opinions or feelings. Speaking the same language does not necessarily lead to perfect understanding. Similarly, being bilingual does not automatically lead to acceptance of the culture of the languages spoken.

I am often asked whether I think in Japanese or in English and similarly whether I dream in Japanese or English. The answer is very simple. When I am speaking in English and am in an English environment I think in English but when I am speaking in Japanese and am in a Japanese environment I think in Japanese. It is comparable to the use of the Japanese "keigo" form where one automatically adjusts one's language according to the people there.

One example to illustrate this point is the memory of a scene which took place when I was about six years old. I remember at the time that I was busily counting something in English 1, 2, 3, 4, 5. Suddenly, my mother interrupted and asked me something in Japanese, I answered also in Japanese and then resumed counting 六, 七, 八, 九, 十 in Japanese. My mother had obviously put me into a Japanese frame of mind so that when I continued my task, I was doing this in another language. At no point did I mentally tell myself to change my thought process. It was something that occurred naturally.

I think people ask me whether I think in English or Japanese on the assumption that I am translating from one language to another but that is not the case. The two languages are very separate in my mind and so, in order to translate or interpret a word, a bridge has to be built between the two languages and this is actually a very difficult thing to do for someone like myself. Take for instance, the word "木" in Japanese. When this word is used, the image I create in my mind is one of, what is to me, a very Japanese-looking tree: tall, thin and light green in colour. When someone says to me the word "tree" I imagine a totally different kind of tree. Suddenly, I am confronted by the image of a huge, leafy, dark green, British tree. Accordingly, the words "木" and "tree" have very different images in my mind. Thus, in order to translate, I have to substitute one image for another and I really have to use my imagination to throw myself into the world of another language.

Being able to get by in two languages means that I am able to communicate with different types of people and thus absorb many different ideas. Yet, knowing the language does not necessarily mean that one has the cultural background or the characteristics which are assumed to be behind the language. In Japan, the problems I have faced have not been to do with language so much as culture.

In the case of say, a non-Japanese person who obviously looks Anglo-Saxon, then Japanese people tend to make allowances for them, thinking right from the beginning that that person will not speak Japanese, will not understand the culture and will be different. I have not had to face the outright curiosity that my non-Japanese friends have had to face. In some cases, my friends have told me that when they sit on a train, Japanese people will avoid sitting next to them at all costs. My friends have frequently interpreted this as dislike and racism but I rather suspect that this avoidance stems from sheer fear that they will have to speak in English. In my case, I can blend into the scenery so that appearance-wise no one would know that I had not been raised in Japan. Yet this, in itself, causes problems. For example, when I first came to Japan, I didn't know how to buy a commuter train pass. Well, when you don't know what to do, the only thing you can do is ask. I asked the man at the ticket office and he gave me the strangest look as though to say, "Isn't it obvious?" The problem was that since I could ask in perfect Japanese how to buy a commuter train pass, the man expected me to know as well.

Another similar incident was when I left my bag on the train. Luckily, someone handed it in and I was able to go and pick it up from the lost and found department. In order to claim the bag, I was asked to use my hanko (stamp) but I had forgotten to take it with me. Instead I was handed a red ink pad and was asked to give my fingerprint. Having only ever been in a situation once where I had to give my fingerprints, I was rather bemused. (Before you start thinking I have a criminal record, I should point out that on the last occasion, I was four years old and was using my hands as imprints to depict leaves!) I stared blankly at the document in front of me wondering which fingers to use. Fortunately, the person next to me was in the middle of pressing her forefinger to the page and so I realised what I had to do. Lucky for me, otherwise I would have left a very nice, well-defined print of my hand on the page. If sumo wrestlers can do it, so can I!

These small misunderstandings crop up everywhere in the simplest of situations. Take for example my sister who went to buy some clothes and had to enter a changing room. In Japan, of course, not only does one take off one's shoes in the house but in the changing room too. It's very well-known that Japanese people take off their shoes in the home but no one has ever mentioned the changing room. The result was that my sister quite happily stepped into a changing cubicle only to be reprimanded (very politely, of course) by the shop assistant to take off her shoes. Or the time my sister went into the communal baths after swimming and found all the women there naked except for herself while she stepped into the bath wearing her swimming suit. How all the women stared! Notice that I am recounting the mistakes made by my sister since it is far too embarrassing to recount my own mistakes!

Another situation is one where there are similarities between my experiences in England and experiences of others in Japan. Japanese people around me often talk about childhood memories. A topic which frequently comes up is when people talk about a school trip to Kyoto, Hokkaido or other places. They talk about the fun they had all sleeping in one room talking late into the night. I usually join in on this conversation until suddenly I realise with a start that I have never been on a Japanese school trip. Of course, I have had similar experiences such as when I went to France and Germany on a school geography trip and so I can relate to the experiences being discussed but when we talk about the finer points such as the food that was eaten, then vast differences appear. Yet, discussing these differences and then talking about preferences leads to an intercultural exchange from which we can

learn so much. Finding differences does not necessarily lessen a conversation but, indeed, can enrich our own experiences.

In order to become international we really do have to accept differences and to recognise the individual and not a stereotype. When I was living in England, I made many friends and all are British but with varying ethnic origins. For example, one friend is British but her mother is French and her father half-Japanese and half-Malaysian; another has a British mother and a Pakistani father; another has Bengali parents but is British herself. This kind of mixed heritage is very common and gives rise to a varied, colourful society. Japan too is starting to face a time when being Japanese does not necessarily mean that one must be of Japanese descent. Once we can accept this, we will be able to realise the potential and chances open to us. Differences should not divide but should strengthen us.

We have to move away from what is regarded as a "typical" Japanese national. Of course, it is dangerous to start talking about a "typical" Japanese person or a typical American or any other national for that matter but Japan is generally monoethnic which means that there is less variety and so it becomes easier to form a stereotype. On August 20, 1999, the UN High Commissioner for Refugees Sadako Ogata said, "Japanese people are relatively monoethnic. We have lived under the illusion of one ethnic race, one culture. But the world is changing, and what is important for the world should be important for us, too."

Having only one dominant ethnic race makes it very difficult for outsiders to assimilate. It becomes a sort of "us or them" situation where there are two groups: insider or outsider. What then should be done about people like myself who fall neither completely into "us" nor "them"? In the future, there are bound to be more people like myself who do not fall into a category and so we will need to form a society where there are no divisions, where everyone will be accepted as an individual. Problems arise because we focus on differences whereas we should be focusing on our similarities. Once we do this, we will realise that regardless of nationality, we are, in fact, more similar than different.